

Attempts to Construct the Image of Political Leaders in Contemporary Cambodia: Examining History Textbooks and the 2013 Election Campaign

Haruno Shintani

Abstract : This article aims to reveal the strategies that have been constructed the image of the leader for Prime Minister Hun Sen, as the Cambodia People’s Party (CPP) achieved its one-party rule in the late 2000s, by analyzing the descriptions in history textbooks and the election campaign in 2013. Before CPP achieved one-party rule, there were political struggles among political parties, each having different recognition of the national history. The view of contemporary history of Cambodia considered Norodom Sihanouk as the great leader, as was written in history textbooks. Since the late 2000s, the CPP tried to change the image of leader in Cambodia and promote a view which considered Hun Sen as one of the great leaders after independence like Sihanouk. This image construction became an obvious part of the CPP campaign strategy during the national election in 2013, notably in posters, a campaign song and a catchword. This embodied an attempt to change the image of CPP leadership from a collective to a personal one with strengthening the memory of Sihanouk.

Keywords : Cambodia, Hun Sen, Sihanouk, election, history education, textbook, political leader, image

「現代カンボジアにおける政治指導者像構築の試み — 国定歴史教科書と 2013 年選挙キャンペーンの分析を中心として」

新谷 春乃

要旨：本稿は、人民党が 2000 年代末に一党支配体制を確立して以降のフン・セン首相の指導者像の構築について、国定歴史教科書の記述と 2013 年の国民議会選挙のキャンペーンの分析を通して明らかにすることを目的とする。人民党が一党支配体制を確立する以前、それぞれ異なる歴史認識を持つ政党が政治闘争を繰り返す中、ノロドム・シハヌークを偉大な指導者と位置づけるカンボジア現代史が教科書の中で叙述された。人民党が一党支配体制を確立すると、シハヌークというカンボジア現代史上の「良い」指導者の系譜にフン・セン自らを位置づける歴史認識を採用し、カンボジア国家の新しい指導者イメージの構築が教科書の中で見られた。このようなイメージ構築は、シハヌークの死後に実施された国民議会選挙における選挙看板、応援歌、標語といったキャンペーン戦略の中で顕在化し、シハヌークをめぐる記憶の強化を伴いつつ、これまでの人民党の指導体制イメージを集団指導からフン・センの個人指導へと転換するものであった。

キーワード：カンボジア、フン・セン、シハヌーク、選挙、歴史教育、教科書、政治指導者、イメージ

はじめに

本稿¹は、カンボジア人民党（គណបក្សប្រជាជនកម្ពុជា、以下人民党）が 2000 年代末に一党支配体制を確立して以降²、人民党が打ち出したフン・セン首相個人の指導者イメージの構築に着目し、その過程を国定歴史教科書の記述と 2013 年の国民議会選挙のキャンペーンを通して明らかにすることを目的とする。

人民党は 1980 年代を通して、カンボジアの統治者として支配の正当性を語る時、クメール・ルーージュ体制の打倒と、その後の内戦で疲弊した国土の再建を強調してきた。これは、

¹ 本稿におけるクメール語表記は、クメール語の発音に近い表記を採用する。ただし、新聞や文献等で広く定着している人名、地名等は慣例に従って表記する。人名、地名、機関名等、クメール語の綴りが分かる場合は本文の初出の際に併記する。

² 2006 年 3 月の改憲によって人民党への権力集中が進み、同党は 2007 年地方選挙と 2008 年総選挙で圧勝し、中央と地方の双方において国家機関の要職を独占するにいたった。また、この間にカンボジアの政党体系はヘゲモニー政党制へと移行を遂げ、2008 年選挙後に発足したフン・セン内閣は、形式上はフンシンペック党との連立を維持しているが、実質的な統治権力はすべて人民党に集中している。これらの点から、カンボジアでは 2008 年選挙後に人民党による一党支配体制が確立したと結論付ける（山田 2011, 145-146）。本稿においても、2008 年選挙以降の体制を人民党による「一党支配体制」と呼ぶこととする。

1979年1月7日にクメール・ルージュ（ខ្មែរក្រហម）体制を打倒し、カンプチア人民共和国（សាធារណរដ្ឋប្រជាមានិតកម្ពុជា）を成立させたカンプチア人民革命党（គណបក្សប្រជាជនបដិវត្តន៍កម្ពុជា、以下人民革命党）を前身とする人民党にとって、統治を開始した直接的要因であり、和平後も人民党が統治を継続することを正当化する実績でもあった。1990年代には、クメール・ルージュとの内戦を平定してきたという平和構築や貧困削減の実績が強調点に加わった。1990年代末にクメール・ルージュが消滅し、内戦の脅威が去ったことで、2000年代に入ると経済発展の側面も強調されるようになった（山田 2011, 148-149）。これらは、チア・シム（ជា ស៊ីម）、フン・セン（ហ៊ុន សែន）、ヘン・サムリン（ហេង សំរិន）という三者による集団指導体制によって達成されたものと見なされた³。これら三者を指導者とする見方は1985年の人民革命党第五回大会で構築されて以来、現在に至るまで、基本的に変更されることはなかった。

ところが近年、このような内戦の記憶を喚起する人民党の語りが通用しない世代が増加傾向にある。2013年の国民議会選挙では、有権者総数968万人中、18歳から30歳の若年層は350万人おり、有権者全体の36%を占めるようになった（山田 2013, 6）。彼らは、クメール・ルージュ体制はおろか、1980年代の内戦に対する生々しい記憶はなく、平和であることが当たり前の社会で育ってきた。そのような若者の増大を2013年選挙における野党躍進の理由として挙げる見方もある⁴。この点に関して第一章で指摘するように、今回選挙民となった若者世代の多くは人民党がプロパガンダで利用する現代史を学んでこなかった。そのような世代に、クメール・ルージュ体制の虐殺や内戦の記憶を喚起し、自らの支配の正当性を語ったところで、実感を持って受け止めてもらうことは難しいだろう。このような特徴を持つ若者世代は今後も次々と選挙へ参入してくる。

従来の戦略に課題が見えつつある中、人民党はフン・セン首相をカンボジア現代史を代表する指導者とするイメージ構築を開始した。この戦略は、歴史教育と選挙キャンペーンを通じて2010年代より展開され始めた。本稿では、一般市民に対する戦略として選挙キャンペーン用に人民党が作成した歌、看板、標語を分析の対象とする。今後有権者となる世

³ 2014年現在、チア・シムは上院議会議長、人民党党首である。ヘン・サムリンは国民議会議長、名誉党首である。フン・センは首相、人民党副党首である。三者の権力構図の変化については注26を参照してほしい。

⁴ 2008年の国民議会選挙では、救国党（គណបក្សសង្គ្រោះជាតិ）の前身であるサム・ランシー党と人権党の両議席を合わせても、全123議席中29議席であったが、2013年の選挙では、55議席を獲得した。このような野党救国党の躍進理由の一つとして、山田は人民党のプロパガンダの観点から次のように指摘している。「1990年代前半生まれのベビーブーム世代が18歳に達したことで、選挙人の年齢構成が変化した。この世代はポル・ポト政権の圧政と1980年代の内戦を直接的には経験していない。したがって、人民党によるポル・ポト政権打倒の実績や「野党が選挙に勝てば内戦になる」というプロパガンダは、若年層の支持調達にはほとんど効果がなかったと考えられる。そればかりか、この世代は1990年代に頻発した国家権力による野党勢力への政治的暴力さえほぼ記憶にないため、他の年齢層に先駆けて躊躇なく救国党への支持を公然と表明し、同党への支持拡大の起爆剤としての役割を担ったのである（山田 2013, 7）。」

代に対しては、教科書の記述等を分析の対象とする。歴史教育は、このような選挙キャンペーンで展開された主張を歴史的事実として裏付ける上で重要である。

人民党による支配の正当性に関する語りは様々な論者によって研究されてきた。Frings は、人民党の前身である人民革命党が政権を獲得した 1979 年から、1990 年代半ばまでの党史に表れる人民革命党の歴史認識の変化に注目した (Frings 1994, 1995, 1997)。1980 年代はクメール・ルージュを打倒したという点が強調された。しかし和平交渉が進展する中、1980 年代に人民革命党政府と対立していたノロドム・シハヌーク (នរោត្តម សីហនុ、以下シハヌーク) の帰国の見通しが立ったことを受け、人民党はこれまで敵対勢力として批判してきたシハヌークの評価を一転させた。シハヌークを「独立の父」であり、サンクム・リアス・ニヨム体制 (សង្គមរាស្ត្រនិយម、以下サンクム体制) を率いてカンボジア社会を繁栄させた偉大な指導者と見なした。それを受けて、人民党は自らをサンクム体制の路線を継ぐ後継者と見なし、1993 年の制憲議会選挙でもこの点を強調した (Frings 1995, 361)。それと同時にクメール・ルージュ体制を打倒し、カンボジアの再建を指導したと訴えた。その後は既述の通り、貧困削減と平和構築の実績が打ち出され、2000 年代になると経済成長が強調されるようになった。

以上のような政治綱領や人民党の党史を分析するアプローチの他に、近年では、人民党の副党首でありカンボジア王国の首相であるフン・セン個人の権力拡大とその象徴化をクメール王権との関係から論じた研究もある。Nilsson は、フン・センによるスダチ・コン⁵に関するナラティブ構築に注目し、王国を長期にわたって統治する非王族であるフン・センが、指導者としての正当性を訴える上で、歴史上の人物スダチ・コンを政治的に利用したと指摘した (Nilsson 2013)。フン・センは、平民から王となったスダチ・コンを自らの生まれ変わりで見なした。スダチ・コンの語りは、フン・セン自身が内戦後の国民和解、平和構築、民主主義を構築したという主張の中に組み込まれた。このようなフン・センの象徴的権力を高める動きは、シハヌークを「国民和解の父」と見なす王党派の思想を浸食する効果を持ち、王族に対する対抗ナラティブであると考察した。王国でありながら、非王族が強大な権力で支配する現代カンボジアにおいて、同地を長く統治してきたフン・セン個人の政治思想を対王族の観点から分析した研究であり、示唆に富む指摘である。

しかしながら、フン・センの政敵であったノロドム・ラナリット (នរោត្តម រណឫទ្ធិ) ⁶ら王

⁵ 16 世紀初頭にスレイ・ソカントー・バート王を倒して王位に就いた非王族出身の人物。

⁶ シハヌークの息子であり、1980 年代に FUNCINPEC (Front Uni National pour un Cambodge Indépendant, Neutre, Pacifique, et Coopératif、独立・中立・平和・協力のカンボジアのための民族統一戦線) に参加した。1993 年の制憲議会選挙の際にフンシンベック党 (គណបក្សប្រ៊ុនស៊ីនប៊ុច) 党首として立候補し、同党が勝利し、第一首相となった。その後人民党と苛烈な政党間争いを行うも、1997 年の 7 月の人民党による対フンシンベック党威嚇行動の後、首相を解任され、国外追放となった。翌年国王からの恩赦を受けて帰国するも、1998 年の国民議会選挙でフンシンベック党は人民党に敗北し、その後徐々に議席を減らしていった。2006 年にフンシンベック党党首を解任された。その後フンシンベック党を離党するも、2015 年 1 月、再びフンシンベック党へ戻った。

党派、シハヌーク元国王、ノロドム・シハモニ（នរោត្តម សីហមុនី）現国王を王族として一括りにし、フン・センと対立する対象として議論する傾向がみられる。本稿で検討する歴史教科書では依然としてシハヌークは国民和解を担った主体として語られる。シハヌークに対するこれまでの歴史認識を覆すような変更は加えられておらず、このような矛盾については言及されていない。対抗関係のみで王族、特にシハヌークとフン・センの関係を論じることには限界がある。

このように権力者が自らの支配の正当性を訴える際に、過去の体制や歴史上の人物に焦点を当て、自らを象徴的存在として位置づける戦略は、地域や時代を問わず、採用されてきた。本稿は人民党が一党支配体制を確立して以降に進展したフン・センの指導者イメージが公教育と選挙キャンペーンの場でいかに構築され、表出したかを考察する。第一章では、人民党による一党支配体制確立以前の現代史教育を考察することで、フン・センのイメージ構築が始まる以前のカンボジアの指導者像を明らかにする。第二章では、2011年に発行された歴史教科書の現代史叙述の分析を主として、第三章では、2013年の国民議会選挙のキャンペーンの分析を通して、フン・センのイメージ構築過程を明らかにする。最後に全体の議論をまとめつつ、将来の課題を示す。

1. 人民党の一党体制確立以前の歴史認識とそれを取り巻く環境

教科書は、「支配者が権力の座にあることを論理的に説明するだけでなく、支配者が優れた能力、正義感、慈悲などの持ち主であることを印象付けることによって、支配者個人に対する情緒的な支持や尊崇の念を喚起する（桜井 1999, 33）」ものであり、特に国定教科書はこの特徴が顕著である。人民党にとって、歴史教科書は自らの支配の正当性を歴史的に説明する上で重要なツールである。1979年1月7日のクメール・ルージュ体制打倒は、人民党が政権を獲得する直接的要因であり、虐殺体制を倒したという歴史的意義を持つものであった。その後の国家再建、内戦終結と平和構築は、人民党のカンボジア政治への貢献を国民に伝える上で不可欠の要素である。それにも拘らず、1993年に王国が復帰して以降、2011年に国定歴史教科書が改訂されるまで、このような歴史認識の形成につながるようなカンボジア現代史教育は十分されてこなかった。

1990年代、公教育は人民党とフンシンペック党との政治闘争に翻弄された（Ayres 2000, 180）。これは歴史教科書の執筆にも当てはまった。1993年の制憲議会選挙において、1979年以来、カンプチア人民共和国とカンボジア国（**ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា**）を統治してきた人民党が僅差で選挙に負け、1980年代に反カンプチア人民共和国を掲げ、クメール・ルージュらと三派連合を結成した FUNCINPEC を前身とするフンシンペック党が第一党となった。両者を調停する形で、フンシンペック党のノロドム・ラナリットを第一首相、人民党のフン・センを第二首相とする「二人首相制」が成立した。二党による覇権争いが激化する中、カンボジア現代史に対して異なる認識を持つ両者を調整し、国定教科書という場で統一見解を提示

することは困難を極めた。そのような状況下、現代史教育も含んだ歴史教育に関する学習指導要領が策定された。その要領は、「1958年、1967年、1980年、1986年発行の指導要領を参考にした（MoEYS 1996, 4）」というように、シハヌークによるサンクム体制下で作成された指導要領と、人民革命党によるカンプチア人民共和国体制下で作成された指導要領の混合という性格を持った。この要領下、国定歴史教科書の中でカンボジア現代史が叙述されるようになるのはしばらく先であった。

この指導要領の策定と前後して発行された『歴史学習 8年生・11年生』（1995年）⁷では、当時、人民党とフンシンペック党が唯一共通見解を出すことが可能であったサンクム時代までが歴史教育の範囲となった。その中で、シハヌークを「独立の父」であり、サンクム体制によってカンボジアに繁栄をもたらした偉大な指導者と見なす認識が現れた（MoEYS 1995, 105）⁸。これは、サンクム体制下の公定史観の復活であった⁹。

そのような状況が変化したのは、1997年7月に起きたフンシンペック党に対する人民党の威嚇行動と翌年の国民議会選挙での勝利、1990年代末のクメール・ルージュの消滅によって、政党間争いや内戦の脅威から人民党が解放された時であった。1999年には9年生（中学校3年生に相当）の歴史教科書、2001年には12年生（高校3年生に相当）の歴史教科書が相次いで発行され、サンクム時代以降のカンボジア現代史に関する歴史叙述が掲載された¹⁰。9年生の教科書の記述量はわずかであったが、12年生の教科書の記述量は豊富で、特にシハヌークの記述に紙面が割かれた¹¹。シハヌークを、カンボジアに独立と繁栄をもたら

⁷ 1995年当時の8年生は中学校3年生、11年生は高校3年生に相当した。同資料は、東京外国語大学大学院総合国際学研究院の岡田知子准教授に提供いただいた。この場を借りて御礼を申し上げます。

⁸ 人民党は1980年代を通して、当時対抗勢力の首班であったシハヌーク個人や、シハヌークによる統治体制であるサンクム体制を徹底的に批判した。それは、1980年代に発表された当時の人民革命党の党史、歴史教科書、指導者の演説の中で如実に表れた。例えば、1987年に発表された『カンボジア史 8年生』の中では、「封建階級とブルジョワ階級性格のため、シハヌーク国王の王国政府は必然的に不安定な状況に陥った（MoEYS 1987, 197）」と描写された。しかし、1991年にパリ和平を締結し、シハヌークがカンボジアに戻ってくるのが確実になった時、「独立の父」として国民の記憶に刻まれたシハヌークを敵対的に扱うことは、人民党にとって利益をもたらすものではなかった。そのため、それ以前のシハヌーク評価を一転させ、シハヌークが統治した時代を「独立、平和、中立」という観点で称賛し、自らをその体制の継承者と位置づける方向に転じた。

⁹ 笹川はサンクム体制当時の公定史観について、シハヌークによる「独立達成への努力という観点からのみ記述され、民主党の存在や意義が言及されることはない（笹川 2003, 136）」と言及している。この時の教科書には、サンクム体制当時の歴史認識と同様の認識が表れている。

¹⁰ 当初は2001年9月に配本予定であったが、2001年12月に印刷が完了し、2002年2月に配本された。The Cambodia Daily (2002年2月14日付)「Controversial History Book Finally Distributed」より。

¹¹ 現代史は、「第二次世界大戦から20世紀末までのカンボジア」の章で教えられており、それは以下の5つの項目で構成された。ノロドム・シハヌーク国王の経歴、独立要求のための十字軍、サンクム時代のカンボジア、1970年代のカンボジア、カンプチア人民共和国。全体のページ数から割合を算出すると、それぞれ14%、19%、28%、20%、19%であった。

し、1980年代末に国民和解へと導いた指導者と位置づける歴史認識が採用された。人民党のカンボジアへの貢献として、1979年1月7日の解放、1980年代の国家建設、1993年以降の平和構築が言及された（MoEYS 2001）。

しかし、ここで発行された12年生の教科書は、その後即回収となり、2008年の再発行まで現代史に関する記述は12年生の教科書から消えた。当時のメディアは次のように伝えた。

教育相曰く、回収の通達は金曜日（著者注：2002年4月26日）にフン・セン殿下が閣僚評議会で指示したものである。その指示の前日、フン・センとフンシンペック党党首ノロドム・ラナリット殿下の会合の中で、「歴史教科書は急いで書かれ過ぎた。重要な歴史的出来事が書かれておらず、日付にも誤りがある。クメール・ルージュの部分は再査定が必要である」という認識で合意したという。その週の水曜日にラナリット殿下は1993年の選挙における人民党の敗北は言及しない一方で、1998年の選挙の勝利は言及されていると批判していた¹²。

確かに、記述内容を見る限り、1993年以降のカンボジア王国時代の記述に問題が見られる。1993年の制憲議会選挙のフンシンペック党の勝利は言及せず、1998年の国民議会選挙での人民党の勝利は言及し、1990年代を通してカンボジア社会にもたらされた政治的安定と平和を人民党による功績とした（MoEYS 2001, 44）。過度に人民党に寄った歴史評価であることは明らかであり、フンシンペック党の抗議は最もであった¹³。その教科書は即回収となり、それが教育現場で十分に利用されることはなかった。2008年にカンボジア現代史を含んだ歴史教科書が発行されるまで、独立以降の現代史は9年生の教科書の中で僅かに言及される程度であった。1990年代の人民党の実績のみならず、クメール・ルージュ体制下で疲弊した国土を再建したという1980年代の実績すらも、教育を通して若者世代へ伝える機会を失った¹⁴。

カンボジアの教科書は国定であるために、策定時だけでなく、発行後も時々の政治の影響を直接受けてきた。教科書策定は、教育・青年・スポーツ省内に設置される執筆委員会、査定委員会を経て、最終的に教育省大臣の認可を得て発行される（図1）。執筆委員会、査定委員会共に教育省内の人員から委員が任命される。これは後述するように歴史という科目が為政者の介入を受けやすいため、記述に問題があった場合に、為政者の意に沿った訂

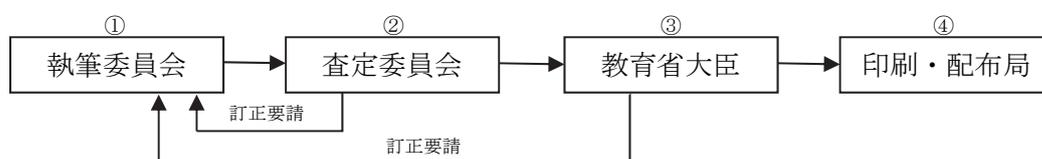
¹² The Cambodia Daily（2002年2月29日付）「Prime Minister Orders Recall of Textbooks」より。

¹³ 問題視されたクメール・ルージュの部分に関しては、2008年に再発行された教科書と比較しても、大きな変更は加えられていない。

¹⁴ 歴史・地理科目の高校教員である Sreyrom 氏（1987年生まれ）へのインタビューによると、独立以降の現代史はほとんど学ぶ機会がなかったという。彼女は、2000年に中学校へ入学し、2003年に高校へ進学しており、現代史教育が不在の中で公教育を受けた。中学3年生の時に現代史について僅かに学んだ程度であり、本格的に現代史教育を受けたのは、王立プノンペン大学の史学科へ進学後であったという。2012年8月7日にプノンペンにてインタビューを実施。

正をすることが求められるからだ。つまり、教育省大臣だけでなく、フン・セン自身も教科書の記述内容に注意を向けてきたと言える。1993 年以來、歴史教科書を執筆してきた S 氏によると、フン・センから用語や日時の変更に関する指示があったという。このように、首相自らが歴史教科書の記述内容を干渉する動きは 1997 年 7 月の威嚇行動以降から本格的に始まり、歴史教科書のみがチェック対象であったという¹⁵。つまり、人民党が政権与党となって以降、歴史教科書の記述は首相をはじめとする人民党指導部のチェック体制下に置かれてきたと言ってよからう。

図 1：教科書策定過程



(出所) 新谷 (2013)

2008 年に発行された 12 年生の歴史教科書では、2001 年に書かれた現代史のうち、1993 年のカンボジア王国成立以前までの歴史が復活した¹⁶。ただし上述のように歴史記述が人民党指導部、特にフン・センのチェックを受ける状況に置かれていたにも拘わらず、1993 年以降の歴史に関しては人民党の意志を全面的に反映することは依然として困難であったようだ。クメール・ルージュ体制からの解放とその後の国家再建の実績は伝えられたが、人民党の実績の一つである和平描写は依然としてシハヌークのみを中心に据えたものであった。

毎回の選挙キャンペーン、毎年 1 月 7 日のクメール・ルージュ体制からの解放記念式典等、人民党が長年支配の座に就いていることを説明する機会は多々あったが、シハヌークのみをカンボジア現代史上の偉大な指導者と強調してきたことと、2008 年までの現代史教育の不在によって、人民党がなぜ支配の座に長年ついているのか、その理由を若者に歴史的事実として説明する機会を失っていたと言える。

2. 「良い」指導者フン・セン像の構築：国定教科書の分析から

人民党は 2008 年の選挙で一党支配体制を確立した後、歴史教育、特に中等教育における現代史教育の抜本的改革を断行した。その理由として、中等教育への就学率の上昇が考えられよう。ユネスコの教育統計によると、1999 年の総就学率は中学校で 21.6%、高校で 10.0%

¹⁵ 2013 年 8 月 15 日、教育・青年・スポーツ省カリキュラム策定局にてインタビューを実施。この日時の変更問題は、2002 年の回収問題の際に指示されたという。

¹⁶ この現代史の復活は、クメール・ルージュ時代の犯罪を裁くカンボジア特別法廷が 2006 年に開廷されたことに伴う現代史教育の必要性への高まりも反映していると言えよう。

であった¹⁷。就学率はその後上昇し続け、2008年には中学校で60.6%、高校で28.4%と2倍以上に増加した。若者世代の半数以上が中学校へ進学していることになる。初等教育では植民地時代以前までを歴史教育の範囲としており、現段階で現代史を盛り込むことはカリキュラムの都合上、難しいという¹⁸。そのような状況で若者世代が現代史を歴史科目として学べる場は中等教育に限定されており、今後も中等教育への進学者は増加傾向にあることを考えれば、人民党が一党支配体制を確立した直後に中等教育における歴史教育を改訂したことは、自らの体制維持の上で自然な成り行きと言える。

歴史教育改革では最初に後期中等教育（高校に相当）の学習指導要領の改訂に着手し、2009年に『後期中等教育のためのクメール語、クメール文学、地学、環境学、社会科学習指導要領』を発行した（MoEYS 2009）。現代史は高校3年時に学ぶ規定となっており、1993年のカンボジア王国の復活までを学習範囲とした。

この要領策定を経て、2011年にカンボジア現代史を含んだ『歴史12年生』が発行された。その教科書には、クメール・ルージュ体制からの解放と、そのクメール・ルージュ体制に関する詳しい記述や、1980年代の人民党主導の国家再建、和平への積極的関与に関する言及が見られた。

このように、人民党が支配の正当性の拠り所としてきた現代史に関する詳細な記述を導入したに加えて、現代史上の指導者像も刷新された。現代史の扉ページには、シハヌークの写真とサンクム体制時に開催された式典の写真を上部に、その下部にはフン・センの写真と複数政党制の象徴としての国民議会の建物と内戦終結の象徴である銃撲滅のモニュメントの写真を掲載した（写真1）。カンボジアの地図を掲載した2001年や2008年の教科書の扉ページとは全く異なるものとなった。フン・センと同列に掲載された建物や記念碑は、1993年以降にカンボジアへもたらされたものであり、2001年の教科書記述で問題となった、「政治的安定と平和」の象徴と言えよう。

¹⁷ ユネスコの教育統計データ <http://data.uis.unesco.org/?queryid=142>（最終閲覧日：2014年10月3日）より。

¹⁸ 2014年9月19日、歴史教科書執筆者S氏へのインタビュー調査より。

写真1：『歴史12年生』（2011年）の現代史の扉ページ



この写真の下には、カンボジア現代史の要約が次のように記された。

カンボジアは1世紀近く（90年間）フランス植民地主義の下に置かれ、クメール市民によって独立を達成した。それは特にノロドム・シハヌーク殿下（ស៊ីហ្គ័នុក្រុង）によって担われ、独立要求闘争運動を立ち上げることでフランスから完全独立を獲得し、「サンクム時代」という繁栄した新しい社会を建設した。1970年、カンボジアは冷戦の影響を受け、内戦へ突入し、多くの人々が殺され、人材を失った。それは特に民主カンブチア体制下で起こった。1979年1月7日、カンボジアは民主カンブチア体制から解放された。しかし戦争は継続した。ノロドム・シハヌーク殿下とフン・セン殿下（ហ៊ុន សែន）は、平和とクメール民族団結のために、紛争当事者間の交渉を通して、クメール人同士の内戦を終わらせる方法を模索した（MoEYS 2011b, 103）。

前半部では、シハヌークが独立と繁栄をカンボジア社会にもたらした点を指摘した。この点に関しては、2000年代初頭の教科書で示された歴史観と同様であり、指導者としてのシハヌークの歴史的評価が維持された¹⁹。異なる点は、和平交渉の記述の中で、「ノロドム・シハヌーク殿下」と「フン・セン殿下」を並列させて、2人の和平への貢献を強調した点である。

これは2人の写真のみが扉ページで使用されていることから、2人をカンボジア現代史を代表する人物と位置づけたい意図は明らかだ。ここでフン・センの尊称に注目すると、明らかに現代の視点から尊称が付されたことが分かる。フン・センは1994年2月に国王から非王

¹⁹ 本文中でも、シハヌークが人々から尊敬を集め、サンクム体制下の成果として経済、インフラ、産業、文化、社会の発展に尽力したことが記された。

族に対して与えられる「殿下」の称号を得ており²⁰、和平交渉時のフン・センに「殿下」を付けることは不自然である。「殿下」という称号は現在のフン・センを想起するものであり、和平当時から現在へと支配を続ける指導者フン・センという視点から叙述されたと言えよう。

これは現代史に関する教科書の記述にも表れた。2001年に発行された歴史教科書では、「民族団結と国民和解のため、カンボジア紛争の当事者はクメール人同士の紛争を終わらせようというノロドム・シハヌーク殿下の願いを受け入れ、歓迎した (MoEYS 2001, 44)」というように、和平交渉の成功はシハヌーク個人の努力によるところが大きいという見方を提示した。一方、2011年の歴史教科書では、そのような説明はされず、あくまでシハヌークとフン・センの両者の努力によって和平交渉が進展したという扉ページの要約同様の認識が示された (MoEYS 2011b, 166)。シハヌークのみを国民和解の父とするのではなく、フン・センとシハヌークの両者をカンボジアへ平和をもたらした指導者と位置づける認識であった²¹。

このような傾向は9年生の歴史教科書でより顕著に見られた。9年生の歴史教科書は、2006年に発行された学習指導要領『一般教育のための社会科学習指導要領詳細版』の規定下で執筆されたものであるが、2011年に内容を大幅に改定した。これまでの簡素な現代史記述から一転し、12年生の教科書同様に詳細な記述が導入された。扉ページは1980年代のカンボジア和平交渉中のシハヌークとフン・センの対話の一場面が採用された (写真 2)。背後にフン・センの政敵であったラナリットも写っているが、この写真の主役は明らかにシハヌークとフン・センである²²。

²⁰ Kret No. NS/KRT/0294/08 (王令 1994 年 2 月第 8 号) にて称号が付与された。

²¹ このような歴史観は、2012 年 10 月のシハヌークの死後、数々の特別追悼番組が作成される中、カンボジア国営放送で 2013 年 1 月に放送された『サンクム時代から現代までのカンボジア』という番組の中でも見られた。1980 年代の和平交渉の描写を説明する際に、「フン・セン殿下とシハヌーク殿下は直接言葉を交わした。それは国民を愛する純粋な気持ちからの行動であり、平和をもたらし、クメール人同士の戦争を終結させるためのものであった」という認識を示した。

²² 2011 年の『歴史 12 年生』でも似たような写真を和平交渉に関する歴史記述があるページに挿入した。そこには、背景にラナリットがいるにも拘わらず、「クメール人同士の戦争を終結させる交渉過程におけるノロドム・シハヌーク殿下とフン・セン氏 (ស៊ីហ៊ុន)」という解説が付された (MoEYS 2011b, 168)。

写真 2 : 『社会科 9 年生』 (2011 年) の現代史の扉ページ



この写真の下には、カンボジア現代史の要約が次のように記された。

国は古代より繁栄してきたが、90 年間にわたってフランス植民地主義者の手に落ちた。独立のための抵抗は次々起こったが、成功しなかった。1953 年 11 月 9 日にノロドム・シハヌーク殿下が指導した独立要求運動によって、市民と祖国へ独立がもたらされた。しかし、冷戦はクメール市民の幸せを次々と破壊した。1991 年 10 月 23 日に UNTAC の支援でカンボジア和平のためのパリ和平協定が締結され、新しいページが開かれた。以前より残存した政治的危機は 1993 年の制憲議会選挙で消え去った (MoEYS 2011a, 105)。

独立運動、冷戦による破壊、和平交渉という観点が、カンボジア現代史の要点として取り上げられた。説明文の上部の写真を加味すれば、和平交渉を担ったフン・センとシハヌークがカンボジアに平和がもたらした点を現代史の中心に据えたことが分かる。教師用の指導書には、教員から生徒へ説明する現代史の学習目的の一つに、「国に平和と繁栄をもたらした良い指導者を愛する意識を育み、模範を提示する (MoEYS 2013, 94) ²³」と記された。ここで示唆される「良い指導者」は掲載写真からも明確なようにシハヌークとフン・センであろう²⁴。カンボジア史において、フン・セン個人を「良い指導者」と見なす評価は、2000 年前後に発行

²³ 原語は、「បណ្តុះបណ្តាលគ្រូស្រុកឡើងវិញដោយគំរូតាមមេដឹកនាំល្អៗ ធ្វើឱ្យប្រទេសជាតិសុខសន្តិភាពនិងអភិវឌ្ឍន៍」である。

²⁴ ここに対置されている「悪い」指導者は、クメール人同士の内戦へ突入させたクメール共和国時代 (1970-1975 年) と民主カンブチア時代 (1975-1979 年) の指導者を指している。特に民主カンブチア時代に関しては、教科書の各時代の学習目的の項目に次のように書かれていることから明らかである。「良くない (មិនល្អ) 模範を持ち、人類が避けるべき悪い経験を記憶する (MoEYS 2011, 142)。」

された教科書には見られなかった。1993年以降の歴史教育を振り返ると、シハヌークのみをカンボジア現代史上の「良い指導者」と見なしてきたが、そのような「良い指導者」という枠組みにフン・センが挿入されたと言える。「良い指導者」シハヌークの記憶の強化は、フン・セン自身の「良い指導者」としての威光を明示する上で必要な要素となった。

このようにシハヌークをカンボジア社会の中で記憶し続ける動きは、教科書のみならず、テレビ等のメディアにおけるフン・センの対応にも表れた。シハヌークの生前、カンボジア国営放送は毎週月曜日の20時よりシハヌークの特別番組を放送してきた。その番組枠について、シハヌークが亡くなった後も継続するよう、フン・センから通達があったという²⁵。この特別番組では、シハヌークに関わった映画作品、演奏会、歌謡ショー等に加えて、カンボジア社会に対するシハヌークの功績をまとめた映像も放映された。また、プノンペン市近郊のフン・セン公園に、2013年10月にシハヌークの彫像が建立され、シハヌークを「独立、領土の完全性、クメール民族団結の父」と説明した（写真3、4）。完成式典に参加したフン・セン首相は、スピーチの中で次のように述べた。「将来の政府を担う次世代は、カンボジアの人々が、国家独立を成し遂げた（著者注：ノロドム・シハヌークの）偉業に敬意を捧げた日として10月15日を記憶し続けてもらいたい。²⁶」番組の継続要請やシハヌークの彫像建設は、シハヌークの記憶を語り継ごうとするフン・センの意志の表れである。特にプノンペン市内でもフン・センの名を冠する公園に建設されたという点は注目に値する。この記憶の強化は、シハヌークの死後次々と改訂される紙幣が、アンコールのモチーフからシハヌークへと移行していることから言える。シハヌーク一人によって占められていた「国民和解の父」という独立後を代表する政治指導者という評価の中に、フン・センも食い込んだという意味で、Nilssonの指摘する「浸食」行為と言えるが、それと同時に、シハヌークを「良い指導者」として記憶する動きが加速していることも確かである。そうすることで、その系譜に位置づけられるフン・センの指導者としての評価も高めようとしていると言えよう。

写真3：シハヌークの彫像（プノンペン）



写真4：彫像に付された解説



²⁵ 2013年2月、カンボジア国営放送で番組作成に携わる方に実施したインタビューより。

²⁶ Phnom Penh Post（2013年10月13日付）「Sihanouk statue inaugurated」より。

このような指導者像の提示の中に、冒頭で述べた三大指導者の他の二人であるチア・シムとヘン・サムリンの名前は出てこない。シハヌークと対置される指導者はあくまでフン・セン 1 人である。この点は、フン・センのスダチ・コンに関するナラティブの中には、チア・シムやヘン・サムリンといった人民党の他の指導者は登場しないという Nilsson の指摘と同様である (Nilsson 2013, 8)。このようなフン・セン個人に焦点を当てる傾向は次章で検討する 2013 年の国民議会選挙の人民党のキャンペーン戦略で顕在化した。

3. 唯一の指導者フン・セン像の構築：2013 年選挙キャンペーンの分析から

投票日の一か月前に選挙キャンペーンが解禁されると、人民党はフン・セン個人に焦点を当てたキャンペーン戦略を展開した。2000 年代前半より、フン・センによる人民党内の権力掌握が進展してきたが、公式の場ではチア・シム、フン・セン、ヘン・サムリンの三者を人民党の指導者とする認識は維持されてきた²⁷。しかし、2012 年の地方評議会選挙から、フン・セン一人に焦点を当てた戦術が開始されるようになった。背景として、チア・シム党首の健康状態の悪化によって公式の場へ姿を現す機会が減ったことと、ヘン・サムリン名誉党首の高齢化が指摘された (山田 2013, 6)。2013 年の国民議会選挙でもその戦術は継続された。一方、王党派のフンシンペック党は、「シハヌーク主義」を掲げて、シハヌークの人気に全面的に依拠した選挙キャンペーンを実施した²⁸。

フン・センに焦点を当てた人民党の選挙キャンペーンは、政党の標語、政党看板、政党応援歌の表現の中に表れた。「もしフン・セン殿下 (ស៊ីហ៊ុន) を愛し、慈しみ、好ましく思い、信頼するならば、人民党に投票を」という標語は、政党看板、キャンペーン用映像等

²⁷ ヘン・サムリンは、「1980 年代末の国内外の環境変化に伴い、党指導部内部でのイデオロギーに対する信奉が弱まり、さらに 1989 年にベトナムというパトロンが去った時に、国内に確固たる権力基盤を構築してこなかったために、急速に影響力を失った (山田 2011, 50)」。またチア・シムに関しては、「1990 年代を通じて勢力均衡状態であった「チア・シム派」と「フン・セン派」であったが、2000 年代に入ると、行政府への権力集中に加えて、チア・シムの高齢化と健康状態の悪化が進んだことで、2000 年代末には「フン・セン派」の優位が確立するにいたった (山田 2011, 152-153)」という。

²⁸ フンシンペック党が政党公約の中で掲げた「シハヌーク主義」とは、1955 年から 1970 年のサンクム時代のシハヌーク路線を継承するという政治方針であった。フンシンペック党の広報官曰く、「フンシンペック党は 1980 年代にシハヌーク殿下が創設した FUNCINPEC を前身としており、シハヌーク殿下とフンシンペック党は切り離せない。2012 年 10 月のシハヌーク殿下の崩御後、様々な特別番組が作成され、その時代を知らない若者世代に至るまでサンクム時代の発展の歴史が伝えられた」という。つまり、シハヌークの死去に伴い、シハヌークの過去の功績に光が当てられ、喧伝される中、シハヌークに対する印象をフンシンペック党と結び付け、党の再興を狙う試みであった。しかし、同選挙においてフンシンペック党は議席を一つも確保できず、国民議会の場から姿を消した。フンシンペック党が全議席を失った要因は様々に考えられるが、イメージとして使われたシハヌークに対する拒絶ではなく、強力な野党として 2012 年にサム・ランシー党と人権党で結成された救国党の躍進が大きいと考える。2013 年 7 月 18 日、プノンペンのフンシンペック党事務所にて、選挙監視活動の一環としてインタビューを実施。

で多用された²⁹。

政党看板については、従来通り人民党の三大指導者であるチア・シム、フン・セン、ヘン・サムリンの三者を掲げたポスターが掲示された一方で、フン・センの個人ポスターも作成され、掲示された（写真5、6）³⁰。

写真5：人民党の選挙看板（プノンペン）① 写真6：人民党の選挙看板（プノンペン）②



人民党はこれまでの選挙でも有名歌手に人民党を称賛する歌を歌わせ、テレビで放映するという戦略をとってきた。2013年の選挙においても有名男性歌手を採用し、テレビで配信した。それと同時に、人民党のキャンペーン映像を中心として、2人の若い男女が歌うフン・センの歌が流れた³¹。

フン・セン殿下（សម្តេច）がいれば、我々のカンボジアに平和がもたらされる
人びとは健やかに繁栄し、生活は向上し、貧困は削減される
フン・セン殿下を愛し、慈しみ、好ましく思い、信頼するならば、人民党に投票を
フン・セン殿下がいれば、賢明な指導者として勇敢に領土を守る
素晴らしき大地の子がクメールを団結させる、殿下（សម្តេចអគ្គមហាសេនាបតីតេជោ）³²の
偉大な作品である

²⁹ 筆者がカンボジア市民フォーラムから国際選挙監視員として派遣され、コンポンチャーム州で開催された人民党の選挙集会を視察した折、会場に置かれたスピーカーでこの標語が大音量で流されていた。また選挙キャンペーン期間中に、選挙管理委員会（National Election Committee）が主催し、カンボジア国営テレビ局で放映された各党の候補者によるラウンド・テーブルでも、人民党の候補者は党の政治綱領を述べた最後にこの標語を述べた。

³⁰ ポスター下方部の写真は、小児病院、寺院、校舎、灌漑水路、道路、橋といった人民党の実績を掲げたものである。

³¹ カンボジアの国営放送などカンボジア国内で放送された番組が閲覧できるインターネットのサイト（http://www.khmerlive.tv/archive/20130628_NEC_Political_Parties_Promotion_Videos_for_The_General_Election_2013.php）で人民党の2013年国民議会選挙のキャンペーン映像が閲覧可能であった（最終閲覧日：2014年5月6日）。

³² Preah Rach Kret No. NS/RKT/1007/506(王令2007年10月12日第506号)にて称号を付与された。

フン・セン殿下を愛し、慈しみ、好ましく思い、信頼するならば、人民党に投票を
フン・セン殿下がいれば、日々大きく急速に必ず発展する
殿下 (ព្រះមហាក្សត្រ) の時代に諸分野へ新たな繁栄がもたらされる
フン・セン殿下を愛し、慈しみ、好ましく思い、信頼するならば、人民党に投票を

ここで取り上げられる実績は、人民党の実績として強調された点であり、将来にわたってそのような実績を積み上げていく指導者としてフン・センを位置づけた。政党看板にも見られるように、チア・シム、フン・セン、ヘン・サムリンの三者が人民党の指導的立場であることは、選挙に合わせて作成された人民党の政治綱領にも明示された³³。しかし、このようにフン・センに焦点を絞り、歌、看板、標語を大々的に使用することは、人民党が三人の指導者を掲げる戦略を一部維持しつつも、フン・セン個人に焦点を絞り、唯一の指導者フン・センというイメージ構築を試みたと言えよう。そこで構築される指導者フン・セン像は、教科書で示された「国に平和と繁栄をもたらした良い指導者」と同様に、いかに素晴らしい指導者であるか印象付けようとしたものであった。

このようなフン・センを現代カンボジアにおける唯一の指導者として掲げる背景には、2008年の選挙で見られた反タイ・ナショナリズムに対する刺激や、経済成長といった人民党の追い風となるような目立った出来事がなかったことも挙げられよう³⁴。選挙キャンペーン開始以前に国民の関心を集めたものは、先に述べたシハヌークの死であった³⁵。2004年の退位後、シハヌークは長期療養に入り、政治の表舞台から退場していたことを考えると、2011年の教科書の時点で現代カンボジアにおける現役の「良い指導者」はフン・セン一人であったとも言える。2012年のシハヌークの死は名実ともに、フン・センを現存する唯一の「良い指導者」とした。それは人民党の選挙看板、応援歌、標語を通して人々へ訴えられた。

ただし、標語やポスター等の利用を越えて、候補者らがフン・センに焦点を当てた選挙キャンペーンを実施するよう指示されたかは、定かではない。選挙キャンペーン期間中に、コンポンチャーム州スレイサントー郡の人民党郡事務所と同州からの立候補者にインタビューをした際、同郡が取り組むべき課題である灌漑整備と漁場管理に加えて、人民党によ

³³ 『祖国を建設し防衛するためのカンボジア人民党政治綱領 2013年－2018年』の「党政治綱領の基本原則」の第9番目に「チア・シム、フン・セン、ヘン・サムリンの実績を維持し、拡大する (CPP 2013, 34)」と記されている。

³⁴ 2008年の国民議会選挙当時、プレハ・ヴィヒア寺院の領有権を巡ってタイと対立していたが、選挙キャンペーン期間中の2008年7月7日にユネスコはプレハ・ヴィヒア寺院のカンボジア帰属を決定した。このことはカンボジア全土で国営放送を通じて放映され、その勢いが人民党への集票に大きく貢献したと言う (Hughes 2009, 211-212)。

³⁵ シハヌークの葬儀を人民党が執り行ったということは、政治綱領の中でも太字で強調された (CPP 2013, 19)。

る平和構築の成果を強調した³⁶。これまでの人民党の主張を踏襲したものであり、フン・セン個人を殊更強調する話しぶりではなかった³⁷。このことは、選挙監視活動で訪問した同郡のミアンチェイ寺(វត្តមានជ័យ)で開催された人民党の選挙集会においても、同様であった³⁸。この集会に参加していた人たちの多くは中高年世代であり、内戦とクメール・ルージュ体制を経験してきた人々であった。各候補者が有権者に直接支持を訴える上で、依然として内戦や民族虐殺の記憶を喚起し、平和を構築してきたという人民党の従来の主張が説得力を持つ相手であった。

ミクロなレベルではそこに参加する有権者の年齢層に配慮した選挙戦略が取られた。一方、国家規模のマクロなレベルで人民党の選挙戦略を見たとき、明らかにフン・セン個人を前面に出して、現代カンボジアを支える指導者というイメージ構築を試みた。それは国定歴史教科書で示されたフン・センを「良い指導者」とみなし、その指導者としての価値を高めた戦略と同様の試みと言えよう。

おわりに

本稿は、人民党が2000年代末に一党支配体制を確立して以降に進められたフン・セン個人を軸とした政治指導者像構築の過程に関して、それが表出した歴史教科書の記述と2013年の国民議会選挙キャンペーンの分析を通じて考察した。人民党は、一党支配体制を確立するまで、国定歴史教科書上で、自らの支配の正当性を十分に語る事が困難であり続けた。それぞれ異なる歴史認識を持つ政党が政治闘争を繰り広げる中、「国定」教科書において、唯一認識を統一できたのは、シハヌークを偉大な指導者としてカンボジア現代史の中に位置づけることであった。一党支配体制が確立して以降、シハヌークというカンボジア現代史上の「平和と繁栄をもたらした指導者」の系譜にフン・セン自らを位置づけようと試みた。そのようなフン・セン個人に焦点を当てた指導者像は、その後実施された国民議会選挙のキャンペーン戦略の中でより顕在化した。それは、集団指導体制というイメージから、フン・センに権力が集中しつつある現状の権力構造を反映して、フン・センの個人指導体制というイメージ転換が行われたメルクマールであった。選挙キャンペーンの内容を決議した党大会の議事録は未入手であるため、今後の更なる検証作業を必要とするが、選挙キャンペーンという党の全体方針が打ち出される場において表出したことは、人民党全体による意思決定の結果と言えよう。また、このような転換が一時的なキャンペーン戦

³⁶ 2013年7月21日、スレイサントー郡人民党郡事務所にて選挙監視活動の一環としてインタビューを実施した。

³⁷ 人民党は過去の選挙と同様、ポル・ポト政権による大虐殺から国民を救ったこと、およびインフラ整備をはじめとする復興と開発の成果という34年間の統治の実績を強調し、平和と安定を維持して開発を継続することを訴えた(山田2013,6)。

³⁸ 2013年7月22日に訪問した。同集会では、フン・センの長男フン・マナエット候補が選挙遊説の一環で訪れていた。ここで彼は、道路建設といった開発の実績や、内戦の記憶を喚起し、人民党の平和構築への貢献を訴えた。

略に留まらないことは、歴史教科書の記述の変容からも明らかである。このような選挙戦略が、ミクロな部分においてどこまで強制力を持って実践されたか疑問が残るものの、自らの支配の正当性を国民へ訴え、支持獲得する上で、現代カンボジアを代表し、シハヌークと同様の「良い指導者」とフン・センを位置づけ、それを強調するという新しいイメージ構築が開始されたと言える。それはシハヌークをめぐる記憶の強化も伴った。

このような戦略を打ち出したものの、2013年選挙では人民党が議席数を大きく減らし、「変革」を掲げた野党救国党が躍進するという結果に終わった。首都の若者は熱狂的な救国党の支持者となり、その熱気は他の年齢層や地方へと波及した（山田 2013: 6）。このような2013年選挙の結果から、フン・セン個人を現代カンボジアを象徴する指導者と見なすイメージ構築で人心を惹きつけることは現状では難しかったと言えよう。ただし、歴史教育を通じた若者世代に対する意識育成は始まったばかりであり、選挙後もフン・セン首相が引き続き権力を握り続けている状況にある。シハヌークの「指導者」としての側面を強調し、シハヌークと並立させてフン・センを現代史を代表する「良い指導者」と位置づけるフン・セン個人指導体制のイメージを強化する傾向が今後も継続されるのか、継続された場合、それが次世代の指導者意識にどのような影響を与えるのか、引き続きの観察と検証が必要である。

【引用文献】

ក្រសួងអប់រំ (Ministry of Education: MoE). ១៩៨៧. ប្រវត្តិវិទ្យាកម្ពុជា ថ្នាក់ទី៨. (教育省. 1987. 『カンボジア史 8 年生』.)

ក្រសួងអប់រំ យុវជន និងកីឡា (Ministry of Education, Youth and Sports: MoEYS). ១៩៩៥. មេរៀនប្រវត្តិវិទ្យា ថ្នាក់ទី៨ និង ទី១១. (教育・青年・スポーツ省. 1995. 『歴史学習 5 年生と 11 年生』)

———. ១៩៩៦. កម្មវិធីសិក្សាគោល សំរាប់ មធ្យមសិក្សា ទុតិយភូមិ. (———. 1996 『後期中等教育のための学習指導要領』.)

———. ១៩៩៩. សិក្សាសង្គម ភូមិវិទ្យា ប្រវត្តិវិទ្យា ថ្នាក់ទី៩. (———. 1999. 『社会科—地理・歴史 9 年生』.)

———. ២០០១. សិក្សាសង្គម ប្រវត្តិសាស្ត្រកម្ពុជា ថ្នាក់ទី១២. (———. 2001. 『社会科—カンボジア史 12 年生』.)

———. ២០០៦. កម្មវិធីសិក្សាលំអិត សិក្សាសង្គម សំរាប់ អប់រំមូលដ្ឋានចំណេះទូទៅ. (———. 2006. 『一般教育のための社会科学学習指導要領詳細版』.)

———. ២០០៨. សិក្សាសង្គម ភូមិវិទ្យា ប្រវត្តិវិទ្យា ថ្នាក់ទី១២. (———. 2008. 『社会科—地理・歴史 12 年生』.)

———. ២០០៩. កម្មវិធីសិក្សាលំអិត ភាសាខ្មែរ និង អក្សរសាស្ត្រខ្មែរ ផែនដី និង បរិស្ថានវិទ្យា និង សិក្សាសង្គម សំរាប់មធ្យមសិក្សាទុតិយភូមិ ថ្នាក់ទី១០-១២. (———. 2009. 『後期中等教育のためのクメール語・クメール文学、地図・環境、社会科学学習指導要領、10 年生—12 年生』.)

———. ២០១១ក. សិក្សាសង្គម ថ្នាក់ទី៩. (———. 2011a. 『社会科 9 年生』.)

———. ២០១១ខ. ប្រវត្តិវិទ្យា ថ្នាក់ទី១២. (———. 2011b. 『歴史 12 年生』.)

———. ២០១២. សៀវភៅគ្រូ ប្រវត្តិវិទ្យា ថ្នាក់ទី១២. (———. 2012. 『教師用歴史 12 年生』.)

———. ២០១៣. សៀវភៅគ្រូ សិក្សាសង្គម ថ្នាក់ទី៩. (———. 2013. 『教師用社会科 9 年生』.)

គណបក្សប្រជាជនកម្ពុជា (Cambodia People’s Party: CPP). ២០១៣. កម្មវិធីនយោបាយរបស់គណបក្សប្រជាជនកម្ពុជា ដើម្បីកសាង និងការពារមាតុភូមិ ឆ្នាំ២០១៣-២០១៨. (カンボジア人民党. 2013. 『祖国を建設し防衛するためのカンボジア人民党政治綱領 2013 年—2018 年』.)

上田広美. 2006. 「削られた現代史—歴史教科書を巡る問題」 上田広美・岡田知子 (編) 『カンボジアを知るための 60 章』 明石書店: 195-98.

桜井啓子. 1999. 『革命イランの教科書メディア』 岩波書店.

笹川秀夫. 2003. 『アンコールの政治史—植民地カンボジアにおける文化政策とその影響』 上智大学学位論文 (博士・地域研究) .

新谷春乃. 2013. 「カンボジア国家の現代史認識—カンボジア人民共和国成立以降のカンボジア国定教科書の変遷」 東京大学学位論文 (修士・地域研究) .

- 山田裕史. 2009. 「カンボジア人民党の特質とその変容（1979～2008年）」上智大学アジア文化研究所 Monograph Series No.4.
- . 2011. 「ポル・ポト政権後のカンボジアにおける国家建設—人民党支配体制の確立と変容—」上智大学学位論文（博士・地域研究）.
- . 2013. 「変革を迫られる人民党一党支配体制」『アジア研ワールドトレンド』219: 4-7.
- Ayres, David M. 2000. *Anatomy of a Crisis: Education, Development, and the State in Cambodia, 1953-1998*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Hughes, Caroline. 2009. “Cambodia in 2008: Consolidation in the Midst of Crisis.” *Asian Survey* 49, no.1: 206-212.
- Frings, Vivian K. 1994. “Allied and Equal: The Kampuchean People’s Revolutionary Party’s Historiography and its Relation with Vietnam (1979-1991)”. Working papers, no. 90 (Monash University, Center of Southeast Asian Studies).
- . 1995. “The Cambodian People’s Party and Sihanouk.” *Journal of Contemporary Asia* 25, no.3: 356-65.
- . 1997. “Rewriting Cambodian History to ‘Adapt’ it to a New Political Context: The Kampuchean People’s Revolutionary Party’s Historiography (1979-1991).” *Modern Asian Studies* 31, no.4: 807-46.
- Nilsson, Astrid N. 2013. “Performance as (re)incarnation: The Sdech Kan narrative”. *Journal of Southeast Asian Studies* 44, no.1: 4-23.

定期刊行物

The Cambodia daily

Phnom Penh Post

自己紹介

Haruno Shintani is a PhD student in Area Studies, Graduate School of Arts and Science, the University of Tokyo. She received a MA in Area studies from the University of Tokyo in 2013. Her current research focuses on political ideology in Cambodia since independence.

謝辞

本稿は、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 2013 年度大学院生・次世代研究者によるワークショップ・シンポジウムシリーズ（第 1 回シンポジウム「一党支配体制下の政治制度、歴史認識、社会統制—2013 年カンボジア総選挙にみる人民党の体制維持戦略—」（於 上智大学、2013 年 12 月 15 日）での報告「歴史認識の政治からみる人民党の動員戦略」をもととし、大幅な修正と加筆をしたものです。シンポジウムでの有益なコメント、匿名の 2 名の査読者からの貴重な助言と指摘に深謝いたします。また、本研究は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：258706）の助成による成果の一部です。